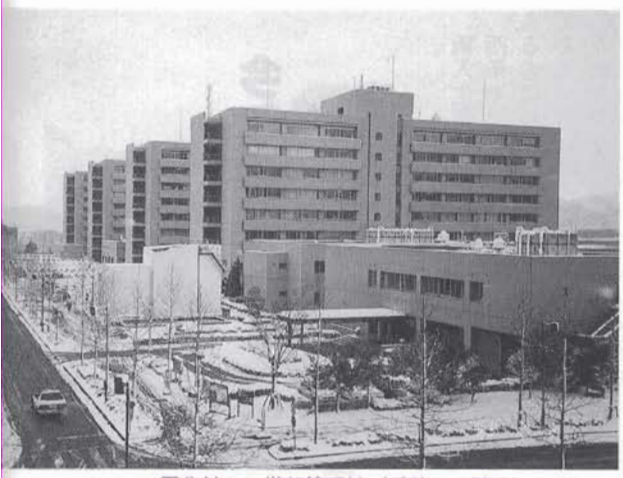
ふしめ

工学部長　佐々木　和　夫

節目（フシメ）とは勿論竹の節であり草木の節から出た言葉であり、物事のけじめを言う。

諸君が高校を出て大学へ入るこの時期は、諸君個々人の生涯の中でも一つの節目であると共に、一九九三年というこの暦の上の時点もまた人類社会の一つの大きな節目になるものと思われる。まずその事を認識して欲しい。



雪化粧の工学部管理棟（手前の２階建）と
４つの高層実験研究棟

ここ数年を振り返っても、東欧の社会主義諸国に大きな節目を生じた。我が国ではバブル経済が破綻し、先行きは不透明だが、簡単に元に戻るとは思えない。つまり節目になりそうだ。オゾンホールの問題も、環境破壊の問題も世界経済の先行きと無縁ではなかろう。東西冷戦が終わるかに見え始めた途端に、地域紛争や民族紛争が一挙に噴き出して解決の緒も見えていない。二十一世紀に於ける重要な政治・経済の課題となりそうだ。

ざっと見回しても右のような状況である。諸君もここらでちょっと想いを廻らせてみる必要があるのではなかろうか。今までは、大学受験だけを念頭に置けば良かっただろう。だが、諸君は生涯の中で一つの節目の時期に立たされていることに想いを馳せてみてはくれまいか。大学生活を高校生活の単純な延長線上に置いてほしくはない。世界史的にも、大きな節目にあることを想えば尚更のことだ。

固苦しいことを書いているのではない。大きな意味でも小さい視野でも君達は節目にいる。それだけだ。

新入生の皆さんへ

工学部学生　山　本　　修

新入生の皆さん入学おめでとう。

四年間大学生活を過ごした今、自分の入学当時を思い出してみた。毎日繰り返し同じ生活を強いられる高校生活から一転し、時間を自由に選べる生活にとても喜びを感じていた。気の合う仲間が自然に集まり、いつも一緒に遊んでいた。テニスサークルに入り、暇があればテニスをしていた。バイトも始め、本当に自由に使えるお金も少しながら得るようになった。もちろんそれなりにまじめに授業にも出ていたし、自分の好きな分野の勉強は一生懸命やった。学年が上がるごとに特に理系は忙しくなるが、楽しい毎日を過ごせたと思う。しかし、やり残したと思うことも多々ある。今考えると四年間はとても短い。ぼやぼやしていると何も残らないまま卒業がきてしまう。とにかく何事にも積極的に行動し、今しかできないことをたくさん経験して、思い出の多い大学生活となるよう毎日を過ごしてほしい。